

Title	福澤諭吉と近代美術 / 主要研究資料
Sub Title	Selected bibliography
Author	前田, 典子(Maeda, Noriko) 前田, 富士男(Maeda, Fujio)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2009
Jtitle	Booklet Vol.17, (2009.) ,p.158- 175
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	FUKUZAWA Yukichi 4
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000017-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤諭吉と近代美術／主要研究資料

前田典子・前田富士男編

A. 福澤諭吉

I. 一次資料

1) 主要著作

- 『増訂華英通語』1860（万延1）年。
「唐人往来」1865（慶應1）年。
『西洋事情』（2編＋外篇）1866-1870（慶應2-明治3）年。
『雷銃操法』（2巻）1866-1869（慶應2-明治2）年。
『西洋旅案内』1867（慶應3）年。
『条約十一国記』1867（慶應3）年。
『西洋衣食住』1867（慶應3）年12月。
『兵士懷中便覧』1868（明治1）年。
『訓蒙窮理図解』1868（明治1）年。
『洋兵明鑑』1869（明治2）年。
『掌中万国一覽』1869（明治2）年。
『英国議事院談』（2巻）1869（明治2）年。
『清英交際始末』1869（明治2）年。
『世界国尽』1869（明治2）年。
「中津留別之書」1870（明治3）年。
『啓蒙手習之文』1871（明治4）年。
『学問のすゝめ』（17編）1872-1876（明治5-9）年。
『童蒙教草』1872（明治5）年。
『かたわ娘』1872（明治5）年。
『改暦辨』1873（明治6）年。
『帳合之法』（4巻）1873-1874（明治6-7）年。
『日本地図草紙』1873（明治6）年。
『文字之教』（第1・第2・附録）1873（明治6）年。
『会議辨』1874（明治7）年頃。
『文明論之概略』1875（明治8）年。
『学者安心論』1876（明治9）年。
「旧落情」1877（明治10）年。
「丁丑公論」[出版は1901（明治34）年]1877（明治10）年。
『分権論』1877（明治10）年。
『民間経済録』（2編）1877—1880（明治10-13）年。
『福澤文集』（2編）1878-1879（明治11-12）年。

『通貨論』1878（明治11）年。
『通俗民権論』1878（明治11）年。
『通俗国権論』（2編）1878-1879（明治11-12）年。
『民情一新』1879（明治12）年。
『国会論』1879（明治12）年。
『時事小言』1881（明治14）年。
「明治辛巳紀事」1881（明治14）年。
『時事大勢論』1882（明治15）年。
『帝室論』1882（明治15）年。
『兵論』1882（明治15）年。
『德育如何』1882（明治15）年。
『學問之獨立』1883（明治16）年。
「慶應義塾紀事」1883（明治16）年。
『全国徴兵論』1884（明治17）年。
『通俗外交論』1884（明治17）年。
「日本婦人論」1885（明治18）年。
『日本婦人論後編』1885（明治18）年。
『士人処世論』1885（明治18）年。
『品行論』1885（明治18）年。
『男女交際論』1886（明治19）年。
『尊皇論』1888（明治21）年。
『日本男子論』1888（明治21）年。
『国会の前途・国会難局の由來・治安小言・地租論』1892（明治25）年。
『実業論』1893（明治26）年。
『福翁百話』1897（明治30）年。
『福澤全集緒言』1897（明治30）年。
『福澤先生浮世談』1898（明治31）年。
『福翁自伝』1899（明治32）年。
『女大学評論・新女大学』1899（明治32）年。
「修身要領」〔慶應義塾編〕1900（明治33）年。
『福翁百余話』1901（明治34）年。
『[明治十年] 丁丑公論・瘦我慢之説』1901（明治34）年。

2) 著作集

『福澤全集』（全5巻）、時事新報社、1898年。
『福澤全集』（全10巻、時事新報社編）、国民図書、1925-1926年。
『福澤論吉選集』（全8巻、福澤論吉著作編纂会編）、岩波書店、1951-1952年。
『福澤論吉全集』（全21巻、慶應義塾編）、岩波書店、1958-1964年。（別巻1971年）。
『福澤論吉選集』（全14巻、富田正文・土橋俊一編）、岩波書店、1980-1981年。
『福澤論吉著作集』（全12巻）、慶應義塾大学出版会、2002-2003年。

3) 書簡集

『福澤論吉書簡集』（全9巻、慶應義塾編）、岩波書店、2001-2003年。

4) 書幅ほか資料集

『福澤先生遺墨集——伝記完成記念』（慶應義塾図書館編）、審美書院、1932年。

『福澤論吉の遺風』（富田正文編）時事新報社、1954年。

『福澤関係文書——福澤論吉と慶應義塾』（マイクロフィルム版福澤関係文書、慶應義塾福澤研究センター編）、雄松堂書店、1989-1998年。

II. 展覧会カタログ

『没後100年記念 世紀をつらぬく福澤論吉』（鷺見洋一・前田富士男・柏木麻里責任編集）、慶應義塾、2001年1月。

『慶應義塾創立150年記念 未来をひらく福澤論吉展』（前田富士男・米山光儀・小室正紀監修、慶應義塾・東京国立博物館・福岡市美術館・大阪市立美術館・産経新聞社編）、慶應義塾、2009年1月。

III. 福澤論吉と芸術・美術

1) 論文

伊藤正雄「福澤論吉と岡倉天心——九鬼隆一をめぐる両者の立場について」、『甲南大学文学会論集』10号、1959年11月。

高橋誠一郎「福澤論吉と文化財保護」、『大和文華』37号、1962年。

椎名仙卓「福澤論吉の啓蒙した博物館」、『博物館研究』21号8巻、1986年8月。

太田臨一郎「福澤先生の美術観」、『福澤手帖』53号、1987年6月。

衛藤駿「福澤論吉の美術観」、『福澤手帖』70号、1991年9月。

佐志伝「福澤論吉、その芸術的環境」、『福澤手帖』83号、1994年12月。

平岡敏夫「福澤論吉と近代文学」、『明治文芸館I・新文学の機運——福澤論吉と近代文学』（上田博・瀧本和成編）、嵯峨野書院、2001年。

日朝秀彦「音羽屋の『風船乗評判高閣』」、『福澤手帖』111号、2001年12月。

金文京「仏像を買う——福澤の仏教観と文化財保護」、『福澤手帖』138号、2008年9月。

B. 幕末・明治の美術

I. 一次資料

la Commission impériale du Japon à l'Exposition universelle de Paris, *Histoire de l'art du Japon*, in: Western sources of Japanese and Japonism, vol. 3, 1900.

横井時冬『日本絵画史』金港堂、1901年12月。

『稿本日本帝国美術略史』（帝国博物館編）、農商務省、1901年12月（復刻版：小路田泰直監修『史料集 公と私の構造 日本における公共を考えるために』別巻、ゆまに書房、2003年4月。）

『明治美術基礎資料集』（東京国立文化財研究所美術部編）、東京国立文化財研究所、1975年。

土方定一『明治芸術・文学論集』（『明治文学全集』79）、筑摩書房、1975年2月。

岡倉天心『岡倉天心全集』全9冊、平凡社、1979～1981年。

フェノロサ著・村形明子編『アーネスト・F・フェノロサ資料 ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵』ミュージアム出版、1982年11月～1987年2月。

『高橋由一油絵史料』（青木茂編）、中央公論美術出版、1985年。

『明治洋画史料 懷想編』（青木茂編）、中央公論美術出版、1985年9月。

『明治洋画史料 記録編』（青木茂編）、中央公論美術出版、1986年12月。

フェノロサ著・山口静一編『フェノロサ美術論集』中央公論美術出版、1988年9月。

『美術』（「日本近代思想大系」第17巻、青木茂・酒井忠康校注）、岩波書店、1989年6月。

『明治前期油画基礎資料集成 東京芸術大学収蔵作品』研究篇・図版篇、中央公論美術出版、1991年2月。

『明治日本画史料』（青木茂編）、中央公論美術出版、1991年5月。

『龍池会報告』（「近代美術雑誌叢書」5、青木茂監修）、ゆまに書房、1991年。

『明治美術会報告』（「近代美術雑誌叢書」6、青木茂監修）、ゆまに書房、1991年。

『明治期美術展覧会出品目録』東京国立文化財研究所、1994年3月。

『日本美術年鑑 明治43年（1910年）』（画報社編）、国書刊行会、1996年8月。

『日本美術年鑑 明治44年（1911年）』（画報社編）、国書刊行会、1996年8月。

フェノロサ著・山口静一編『フェノロサ社会論集』思文閣出版、2000年2月。

岡倉天心『日本美術史』平凡社、2001年1月。

『内国絵画共進会』（「近代日本アート・カタログ・コレクション」001-004、東京国立文化財研究所編）、ゆまに書房、2001年5月。

『観古美術会』（「近代日本アート・カタログ・コレクション」005-007、東京国立文化財研究所編）、ゆまに書房、2001年5月。

『明治美術会』（「近代日本アート・カタログ・コレクション」008、東京国立文化財研究所編）、ゆまに書房、2001年5月。

『明治後期油画基礎資料集成 東京芸術大学収蔵作品』研究篇・図版篇、中央公論美術出版、2004年9月。

『日本美術史（Histoire de l'art du Japon 復刻版）』（巴里万国博覧会臨時事務局編・馬淵明子解説）、エディション・シナプス、2005年。

II. 展覧会カタログ

『近代日本美術史におけるパリと日本』東京国立近代美術館、1973年。

『日本近代洋画の巨匠とフランス——ラファエル・コラン、ジャン＝ポール・ローランズと日本の弟子たち』（石橋財団ブリヂストン美術館・三重県立美術館編）、東京新聞、1983年。

『現代の眼——近代日本の美術から』東京国立近代美術館、1974年。

『フォンタネージ、ラグーザと明治前期の美術』東京国立近代美術館、1977年。

『写実の系譜Ⅰ 洋風表現の導入』東京国立近代美術館、1985年10月。

『写実の系譜Ⅲ 明治中期の洋画』東京国立近代美術館、1988年10月。

『没後一〇〇年記念特別展覧会 狩野芳崖——近代日本画の先駆者』（京都国立博物館編）、京都新聞社、1989年2月。

『近代美術の巨人たち 帝室技芸員の世界』サントリー美術館、1996年。

『日本美術院創立一〇〇周年記念特別展——近代日本美術の軌跡』（東京国立博物館編）、日本美術院、1998年3月。

『岡倉天心とボストン美術館』名古屋ボストン美術館、1999年10月。

『黒田清輝展——近代日本洋画の巨匠』東京文化財研究所、滋賀県立近代美術館、2001年。

『黒田清輝、岸田劉生の時代——コレクションに見る明治・大正の画家たち』ポーラ美術館、2005年。

『岡倉天心——芸術教育の歩み』（柴田卓編）、東京藝術大学岡倉天心展実行委員会、2007年10月。

『明治の洋画——解説から鑑賞へ』茨城県近代美術館、2008年。

『帝室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会』宮内庁三の丸尚蔵館、2008年7月。

『狩野芳崖——悲母観音への軌跡毛』（東京藝術大学大学美術館・下関市立美術館編）、ミュージアムショップ、2008年8月。

Ⅲ. 二次資料

1) 単行書

石井柏亭『日本に於ける洋風畫の沿革』（「岩波講座日本文學」12）、岩波書店、1932年9月。

土方定一『近代日本文學評論史』西東書林、1936年4月。

平木正次『明治初期洋画壇回顧』日本エッチング研究所出版部、1936年8月。

隅元謙次郎『明治初期来朝伊太利亞美術家の研究』三省堂、1940年11月。

土方定一『近代日本洋画史』昭森社、1941年5月。

森口多里『明治大正の洋画』東京堂、1941年6月。

石井柏亭『日本絵画三代志』創元社、1942年7月（復刻版：「日本藝術名著選」2、べりかん社、1983年10月）。

石井柏亭『画人東西』大雅堂、1943年6月。

森口多里『美術五十年史』鱒書房、1943年6月。

黒田重太郎『京都洋画の黎明期』高桐書院、1947年1月。

森口多里『美術八十年史』美術出版、1954年5月。

矢代幸雄『近代画家群』新潮社、1955年11月。

木村重夫『日本近代美術史』造形芸術研究会、1957年1月。

河北倫明『日本の美術——その伝統と現代』（「現代教養文庫」189）、社会思想研究会出版部、1958年1月。

河北倫明（他）『近代の洋画人』中央公論美術出版、1959年11月。

隅元謙次郎『近代日本美術の研究』東京国立文化財研究所、1964年6月。

匠秀夫『近代日本洋画の展開——近代日本洋画史序説』昭森社、1964年12月。

河北倫明『近代美術の流れ』（「日本の美術」24）、至文堂、1965年3月。

山本正男『東西芸術精神の伝統と交流』理想社、1965年5月。

宮川寅雄『近代美術とその思想』理論社、1966年。

本間正義『日本の絵画〈洋画編Ⅰ〉』（「現代世界美術全集」15）、河出書房新社、1967年。

原田実『明治の洋画』（「日本の美術」30）、至文堂、1968年10月。

河北倫明『近代日本美術の研究』社会思想社、1969年。

宮川寅雄『近代美術の軌跡』中央公論社、1972年。

高階秀爾『日本近代美術史論』講談社、1972年。

浦崎永錫『日本近代美術発展史』東京美術、1974年7月。

中村義一『近代日本美術の側面 明治洋画とイギリス美術』造形社、1976年9月。

土方定一『近代日本の画家論Ⅰ』（「土方定一著作集」6）、平凡社、1976年9月。

佐々木静一・酒井忠康編『近代日本美術史Ⅰ 幕末明治』有斐閣、1977年。

『河北倫明美術論集』（全5巻）、講談社、1978年2月-4月。

高階秀爾『日本近代の美意識』青土社、1978年3月。

河北倫明・高階秀爾『近代日本絵画史』中央公論社、1978年4月。

青木茂『フォンタネージと工部美術学校』（「近代の美術」46）、至文堂、1978年5月。

小林忠『日本美術院』（「原色現代日本の美術」2）、小学館、1979年5月。

坂本満『近代の胎動』（「原色現代日本の美術」1）、小学館、1980年1月。

中村義一『日本近代美術論争史』求龍堂、1981年4月。

匠秀夫（他）『明治大正の美術』有斐閣、1981年5月。

中村義一『続日本近代美術論争史』求龍堂、1982年7月。

山内祥史『日本近代文學考』双文社書房、1983年6月。

青木茂『油絵初学』筑摩書房、1987年9月。

『東京藝術大学百年史』（第1巻、東京藝術大学百年史刊行委員会）、ぎょうせい、1987年10月。

佐々木静一『洋風画のコンセプトとマテリアルをめぐって』（「日本近代美術論」1）、瑠璃書房、1988年11月。

日本美術院百年史編集室編『日本美術院百年史』日本美術院、1989年4月～。

北澤憲昭『眼の神殿——「美術」受容史ノート』美術出版社、1989年9月。

『江戸から明治へ』（「日本美術全集」21、高階秀爾（他）編）、講談社、1991年4月。

『日本近代美術と西洋——明治美術学会国際シンポジウム』（明治美術学会編）、中央公論美術出版、1992年4月。

河北倫明『美術思考』（「河北倫明美術時評集」5）、思文閣出版、1992年6月。

『東京藝術大学百年史』（第2巻、東京藝術大学百年史刊行委員会）、ぎょうせい、1992年8月。

瀧三『日本近代美術事件史』東方出版、1993年1月。

木下直之『美術という見世物』平凡社、1993年6月。

『日本洋画商史』（日本洋画商協同組合編）、日本洋画商協同組合、1994年11月。

『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』（西川長夫・松宮秀治編）、新曜社、1995年3月。

山梨絵美子『高橋由一と明治前期の洋画』（「日本の美術」349）、至文堂、1995年6月。

三輪英夫『明治の渡欧画家』（「日本の美術」350）、至文堂、1995年7月。

田中淳『黒田清輝と白馬会』（「日本の美術」351）、至文堂、1995年8月。

児島薫『鹿子木孟郎と太平洋画会』（「日本の美術」352）、至文堂、1995年9月。

島田康寛『浅井忠と京都洋画壇』（「日本の美術」353）、至文堂、1995年10月。

『絵画の明治——近代国家とイメージーション』（高階秀爾監修）、毎日新聞社、1996年7月。

『東京藝術大学百年史』（第3巻、東京藝術大学百年史刊行委員会）、ぎょうせい、1997年3月。

佐藤道信『明治国家と近代美術 美の政治学』吉川弘文館、1999年4月。

『語る現在、語られる過去——日本の美術史学100年』（東京文化財研究所編）、平凡社、1999年5月。

北澤憲昭『境界の美術史——「美術」形成史ノート』ブリュッケ、2000年6月。

匠秀夫・原田実・酒井忠康『明治大正の美術——洋画・日本画・彫刻・版画・工芸のあゆみ』有斐閣、2001年。

鈴木廣之『好古家たちの19世紀——幕末明治における《物》のアルケオロジー』吉川弘文館、2003年10月。

金原宏行『近代日本美術の伏流』沖積舎、2004年11月。

『近代日本の成立——西洋経験と伝統』（西村清和・高橋文博編）、ナカニシヤ出版、2005年1月。

佐藤道信『美術のアイデンティティ——誰のために、何のために』吉川弘文館、2007年3月。

鈴木隆敏編著『新聞人福澤諭吉に学ぶ——現代に生きる時事新報』産経新聞出版、2009年3月。

2) 論文

樋口秀雄「帝室技芸員制度——帝室技芸員の設置とその選定経過」、『東京国立博物館研究誌』202号、1968年1月。

長谷川栄「起立工商会社——明治初期工芸職人団の組織と活動」、『東京国立博物館研究誌』232号、1970年7月。

村形明子「ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵遺稿 -3- フェノロサの京都社寺什宝調査メモ〔含 英語原文〕」『英文学評論』43号、1980年8月。

村形明子「フェノロサと美術行政 -下- (ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵フェノロサ資料)」『東京国立博物館研究誌』362号、1981年5月。

山口静一「フェノロサと美術行政 1——図画調査会・図画取調掛委員会」、『埼玉大学紀要外国語学文学篇』15号、1981年。

竹居明男「明治二十一年八月二十九日の九鬼隆一談話の記録——同年近畿地方古美術調査に伴う“啓蒙”活動」、『Lotus』3号、1983年2月。

山口静一「フェノロサ—明治政府とのかゝわり -1- (明治の夜明け〈特集〉)」、『日本古書通信』54巻2号、1989年2月。

山口静一「フェノロサ—明治政府とのかゝわり -2- (明治の夜明け〈特集〉)」、『日本古書通信』54巻3号、1989年3月。

山口静一「岡倉天心書簡(九鬼隆一宛)について」、『Lotus』11号、1991年3月。

佐藤道信「近代国家と美術行政」、『文化庁月報』371号、1999年8月。

河上眞理「工部美術学校設立事情考」、『美術史』155号、2003年10月。

佐藤道信「帝室技芸員と帝国美術院会員」、『三の丸尚蔵館年報・紀要』12号、2005年。

C. 文化財保護

I. 一次資料

『古社寺保存便覧 古社寺保存法注解、同保存出願手続』(山崎有信編)、最勝閣、1903年12月。

『特別保護建造物及國寶帖』(内務省宗教局編)、審美書院、1910年7月。

II. 展覧会カタログ

『日本国宝展——文化財保護法50年記念』東京国立博物館、読売新聞社、2000年3月。

III. 二次資料

1) 単行書

『文化財保護の歩み』文化財保護委員会、1960年11月。

2) 論文

倉田文作「明治の美術工芸(明治百年と明治の文化財)」、『文部時報』1096号、1968年11月。

吉沢忠「明治・大正時代と現代との古美術品評価の変化——古社寺保存法と文化財保護法との対比を中心に」、『国華』949号、1972年8月。

西村幸夫「建造物の保存に至る明治前期の文化財保護行政の展開——「歴史的環境」概念の生成史その1」、『日本建築学会計画系論文報告集』340号、1984年6月。

村形明子「御雇い外国人と黎明期の文化財行政」、『月刊文化財』250号、1984年7月。

西村幸夫「明治中期以降戦前における建造物を中心とする文化財保護行政の展開——「歴史的環境」概念の生成史その2」、『日本建築学会計画系論文報告集』351号、1985年5月。

西村幸夫「土地にまつわる明治前期の文化財保護行政の展開——「歴史的環境」概念の生成史その3」、『日本建築学会計画系論文報告集』358号、1985年12月。

西村幸夫「古社寺保存法第1~4条の成立過程に関する研究」、『明治大学工学部研究報告』48号、1985年。

小川伸彦「制度としての文化財——明治期における〈国宝〉の誕生と宗教・美術の

問題」、『ソシオロジ』35 (3)、1991 年 2 月。

「特集 文化財指定制度（古社寺保存法制定）100 周年」、『月刊文化財』411 号、1997 年 12 月。

清水重敦「明治初期古社寺保存行政における内務省社寺局と博物局」、『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』1997 巻、1997 年。

D. 博覧会・展覧会・博物館

I. 一次資料

『教育博物館規則』教育博物館、1877 年 8 月。

『教育博物館規則』教育博物館、1879 年 7 月。

『教育博物館規則』教育博物館、1879 年 7 月。

『教育博物館案内』教育博物館、1881 年 10 月。

『千九百年巴里万国博覧会臨時博覧会事務局報告』（上・下）、農商務省、1902 年。

『東京教育博物館一覧 明治 40-45 年』東京教育博物館、1907-1912 年。

『帝室博物館略史』東京帝室博物館、1938 年。

『内務省第一回年報・勸業寮・博覧会ノ件』（「内務省年報・報告書」第 2 巻）、三一書房、1983 年 2 月。

『明治文化全集』（10 巻、明治文化研究会編）、日本評論社、1992 年 7 月。

『内国勸業博覧会美術品出品目録』（東京国立文化財研究所美術部編）、中央公論美術出版、1996 年。

『明治期万国博覧会美術品出品目録』（東京国立文化財研究所編）、中央公論美術出版、1997 年 5 月。

II. 展覧会カタログ

『ルーツ・日本の博物館——物産会から博覧会へ』大阪市立博物館、1979 年 10 月。

『博覧都市・江戸東京——開帳、盛り場、そして物産会から博覧会へ』（東京都江戸東京博物館）、江戸東京歴史財団、1993 年 11 月。

『世紀の祭典万国博覧会の美術——2005 年日本国際博覧会開催記念展——パリ・ウィーン・シカゴ万博に見る東西の名品』（東京国立博物館他編）、NHK・NHK プロモーション・日本経済新聞社、2004 年。

III. 二次資料

1) 単行書

永山定富『内外博覧會總説竝に我國に於ける萬國博覧會の問題』水明書院、1933 年 9 月。

『帝室博物館略史』帝室博物館、1938 年 11 月。

吉田光邦『万国博覧会——技術文明史的に』（「NHK ブックス」106）、日本放送出版協会、1970 年 1 月。

山本光雄『日本博覧会史』理想社、1970 年 6 月。

『東京国立博物館百年史』東京国立博物館、1973 年 3 月。

芳賀登『明治国家と民衆』雄山閣、1974 年 11 月。

『国立科学博物館百年史』国立科学博物館、1977 年 11 月。

『図説万国博覧会史 1851～1942』（吉田光邦編）、思文閣出版、1985 年 3 月。

『万国博覧会の研究』（吉田光邦編）、思文閣出版、1986 年 2 月。

椎名仙卓『明治博物館事始め』思文閣出版、1987 年 12 月。

椎名仙卓『日本博物館発達史』雄山閣、1988年7月。
 宮永孝『文久二年のヨーロッパ報告』新潮選書、1989年6月。
 『目でみる120年』東京国立博物館、1992年10月。
 山口一夫『福澤諭吉の亜欧見聞』福澤諭吉協会、1992年11月。
 『調査研究報告書 温知図録』（東京国立博物館編）、国書刊行会、1997年3月。
 角山幸洋『ウィーン万国博の研究』関西大学出版会、2000年3月。
 勝田政治『内務省と明治国家形成』吉川弘文館、2002年2月。
 『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』（西川長夫・松宮秀治編）、新曜社、2002年2月。
 松田京子『帝国の視線 博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2003年11月。
 國雄行『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』岩田書院、2005年5月。
 椎名仙卓『日本博物館成立史——博覧会から博物館へ』雄山閣、2005年6月。
 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年6月。

2) 論文

児島喜久雄「官展及び美術院の問題」、『塔』1号、1949年1月。
 椎名仙卓「明治になって初めての“物産会”と“博覧会”」、『博物館研究』21巻11号、1986年11月。
 椎名仙卓「博物館が主催した官設美術展の創始“観古美術会”」、『博物館研究』23号、1988年10月。
 吉見俊哉「博覧会の政治——明治国家形成と内国勸業博覧会」、『都市問題』79巻11号、1988年11月。
 國雄行「内国勸業博覧会の基礎的研究——殖産興業・不平等条約・「内国」の意味」、『日本史研究』375号、1993年11月。
 古田亮「日本の美術展覧会——その起源と発達」、『東京国立博物館研究誌』545号、1996年。
 木下直之「コンドル以前——第1回内国勸業博覧会美術館をめぐる考察（〔1997年度建築史学会大会〕記念シンポジウム——美術史から見た近代建築史研究のパスベクティブ）」、『建築史学』29号、1997年9月。
 橋詰文彦「田中芳男と万国博覧会——明治期における実務官僚の役割」、『長野県立歴史館研究紀要』3号、1997年。
 坂本久子「フィラデルフィア万国博覧会とアーネスト・F・フェノロサ」、『近畿大学九州短期大学研究紀要』31号、2001年。
 「特集 日本近代美術と「官展」」、『近代画説』16号、2007年。
 北口由望「明治天皇と内国勸業博覧会行幸——殖産興業政策における天皇の役割を中心に」、『書陵部紀要』59号、2007年。
 堀松武一「庶物指数の展開と東京教育博物館の役割」、『東京学芸大学紀要』第20集第1部門、1966年。
 椎名仙卓「黎明期における「教育博物館」の実態——標本に関する事項を中心として」、『博物館研究』44巻4号、1972年2月。
 尾崎元春「帝室博物館時代の陳列品収集（歴史関係）（東京国立博物館陳列品収集の歩み（特集）」）、『東京国立博物館研究誌』262号、1973年1月。
 椎名仙卓「教育博物館の資料収集（投稿）」、『博物館研究』45巻2号、1973年5月。
 椎名仙卓「わが国博物館史上最初の科学講演会——東京教育博物館の学術講義」、『博物館研究』9巻10・11号、1974年11月。
 椎名仙卓「教育博物館の成立」、『博物館学雑誌』2巻1号・2号、1977年3月。
 椎名仙卓「教育博物館の生みの親・育ての親」、『季刊自然科学と博物館』44巻1号、1977年。

「明治時代以前からの博物館活動——文部省博物館から教育博物館へ（国立科学博物館開館100年〈特集〉）」、『季刊自然科学と博物館』44巻3号、1977年。

「教育博物館の設立とその活動（国立科学博物館開館100年〈特集〉〔含 付録〕」、『季刊自然科学と博物館』44巻4号、1977年。

村形明子・前久夫「アーネスト・F・フェノロサの建築に関する手稿——奈良帝国博物館（陳列館）運営計画の諸条件」、『建築雑誌』93巻1135号、1978年5月。

椎名仙卓「明治後半期に於ける博物館設置・運営論——田中芳男・箕作佳吉・棚橋源太郎の構造」、『博物館研究』13巻8・9号、1978年9月。

村形明子「フェノロサの宝物調査と帝国博物館の構想」、『東京国立博物館研究史』347号・348号、1980年2月・1980年3月。

高橋隆博「『奈良博覧会』について——明治初期の文化財保護の動向と関連して」、『月刊文化財』217号、1981年10月。

中川成夫「明治時代の博物館収蔵品目録の一例——教育博物館列品目録」、『博物館研究』21巻9号、1986年9月。

椎名仙卓「博物館発達の原点を博物学之所務に探る」、『博物館研究』22巻1号、1987年1月。

山口静一「フェノロサの美術館論を読む」、『東京国立博物館研究誌』441号、1987年12月。

佐藤道信「明治美術と美術行政」、『美術研究』350号、1991年2月。

椎名仙卓「我が国における博物館の始まり（博物画の世界一）」、『国立科学博物館ニュース』333号、1996年12月。

佐藤優香「教育博物館における教育機能の拡張——手島精一と棚橋源太郎による西洋教育情報の受容」、『博物館学雑誌』23(2)、1998年3月。

佐藤優香「手島精一の教育博物館経営——文部省の博物館政策との関係を中心にして（教育改革と教育政策研究）」、『日本教育政策学会年報』5号、1998年。

永野光一・水野信太郎「わが国における旧帝国博物館の成立過程」、『北海道女子大学短期大学部研究紀要』36号、1999年。

松宮秀治「岡倉天心と帝国博物館」、『立命館経済学』298号、2001年12月。

斎藤千蘭「フェノロサの美術館論——美術博物館とその一般市民との関係」、『Lotus』22号、2002年3月。

財部香枝「明治初年における森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの交流——西洋の博物館受容過程」、『博物館学雑誌』28号、2003年3月。

三上美和「明治期官立博物館の特別展覧会——その多様性と影響」、『Lotus』25号、2005年3月。

内川隆志「研究ノート 博物館の目利きたち——明治初期の文化財保護とそれを支えた人々」、『國學院大學博物館學紀要』30号、2005年。

朴昭炫「『近代美術館』への転回——洋画家たちの美術館設立運動」、『文化資源学』5号、2006年。

福井庸子「東京教育博物館「特別展覧会」に関する考察——社会教育体制移行の過程に注目して」、『文化資源学』5号、2007年3月。

白井克也「フィッシャー夫妻と東京帝室博物館——日独交換事業に関する研究(1)」、『東京国立博物館研究誌』602号、2007年6月。

研谷紀夫「戦前期における博覧会及び帝国・帝室博物館の目録形式の変遷」、『アート・ドキュメンテーション研究』15号、2008年3月。

E 美術教育

I. 展覧会カタログ

『岡倉天心 芸術教育の歩み』東京藝術大学岡倉天心展実行委員会、2007年10月。

Ⅱ．二次資料

1) 単行書

金子一夫『近代日本美術教育の研究——明治時代』中央公論美術出版、1992年2月。

金子一夫『近代日本美術教育の研究——明治・大正時代』中央公論美術出版、1999年4月。

2) 論文

佐々木静一「美術と明治初期の外人教師——フォンタネージとフェノロサ」、『日本歴史』26号、1950年7月。

磯崎康彦「東京美術学校カリキュラムと嘱託教員としての森鷗外（明治二十四—明治三十二年）」、『東京芸術大学美術学部紀要』9号、1973年3月。

磯崎康彦「東京美術学校における岡倉覚三校長の講義内容（その一）——「東洋美術史」について」、『東京芸術大学美術学部紀要』10号、1975年3月。

磯崎康彦「続・東京美術学校における岡倉覚三校長の講義内容（その一）——「東洋美術史」について」、『東京芸術大学美術学部紀要』11号、1976年3月。

橋本泰幸「美術教育方法の史的展開についての研究Ⅰ——明治初期における教授法」、『広島大学学校教育学部紀要 第1部』5号、1982年12月。

高田美一「フェノロサの『美術真説』解説・続篇——美術に関する英文遺稿を素材にして」、『跡見学園女子大学紀要』16号、1983年3月。

橋本泰幸「美術教育方法の史的展開についての研究——Ⅱ明治中期における教授法」、『広島大学学校教育学部紀要 第1部』6号、1984年1月。

橋本泰幸「美術教育方法の史的展開についての研究——Ⅲ明治後期における教授法」、『広島大学学校教育学部紀要 第1部』7巻、1984年12月。

利光功「岡倉天心の美術教育思想」、『共同研究報告〔明治期の芸術教育〕』4号、1984年12月。

立原慶一「明治初期、鉛筆画・毛筆画論争をめぐる図画教育観と教育者像——小山正太郎、フェノロサ、岡倉天心を中心として」、『美術教育学』7号、1985年11月。

斉藤峰「明治期美術教育における英国美術工芸思想の影響に関する一考察——応用美術的観点からみた明治期図画教育の転換を中心として（研究ノート）」、『教育学論集』15号、1986年3月。

佐藤道信「鑑画会再考」、『美術研究』340号、1987年11月。

橋本泰幸「美術教育方法の史的展開についての研究Ⅵ——教授資料にみる明治より昭和初期までの変化」、『広島大学学校教育学部紀要 第1部』11号、1988年12月。

円山茂子「美術教育の変遷考——明治時代から現代まで」、『宝塚造形芸術大学紀要』2号、1989年6月。

梶田幸恵「明治初期の図画教育方法の研究——開智学校における鉛筆画教育」、『大学美術教育学会誌』22号、1990年3月。

赤木里香子「明治初期における欧米美術教育情報の受容について——翻訳教育書に見られる描画に関する記述」、『美術教育学』12号、1991年3月。

金子一夫、伊沢のぞみ「工部美術学校における彫刻教育の研究-1-」、『茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学・芸術』42号、1993年3月。

橋本泰幸「フェノロサの美術教育——NOTANの意味したもの」、『鳴門教育大学研究紀要 教育科学編』9号、1994年。

金子一夫、伊沢のぞみ「工部美術学校における彫刻教育の研究-2-」、『茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学・芸術』44号、1995年3月。

向野康江「明治・大正期における趣味教育の承譜——その興隆から図画教育へ」、『大学美術教育学会誌』27号、1995年3月。

岡田千歳「メーソンとフェノロサの芸術教育観」、『桃山学院大学教育研究所研究紀要』4号、1995年3月。

「（特別展）結成100年記念 白馬会 明治洋画の新風 開催記念シンポジウム（誌上報

告)」、『近代画説』5号、1997年3月。

磯崎康彦「東京美術学校カリキュラムと嘱託教員としての森鷗外」、『東京芸術大学美術学部紀要』16号、1977年。

磯崎康彦「蕃書調所、開成所の画学局における画学教育と川上冬崖」、『福島大学教育学部論集 教育・心理部門』67号、1999年12月。

藤本陽子「岡倉天心在職中における東京美術学校のカリキュラムと実際——茨城県天心記念五浦美術館所蔵東京美術学校学生制作品について」、『茨城県近代美術館研究紀要』8号、2000年。

依国昭「明治初期の美術教育——その動向と背景」、『桃山学院大学教育研究所研究紀要』10号、2001年3月。

橋本泰幸「明治の図画教育（2）毛笔画教育への移行の要因」、『鳴門教育大学研究紀要』16号、2001年。

山田信宏「東京教育博物館における社会教育」（早稲田大学教育学部大槻宏樹研究室編『社会教育の杜 大槻宏樹教授早稲田大学50年を祝して』、成文堂、2003年3月。

福井庸子「棚橋源太郎の博物館教育観の背景」（早稲田大学教育学部大槻宏樹研究室編『社会教育の杜 大槻宏樹教授早稲田大学50年を祝して』、成文堂、2003年3月。

北澤憲昭「日本近代美術教育歴史管見——蕃書調所画学局から自由画運動まで」、『演劇人』20号、2005年。

神野真吾「『美術』と『美術教育』の距離——近代以降の展開を辿って」、『美術教育学』27号、2006年3月。

F. 美学・美術史学の流れ

I. 一次資料

高山林次郎『近世美學』（『帝國百科全集』34）、博文館、1899年9月。

高山林次郎『美學及美術史』博文堂、1904年1月。

『西周全集』（大久保利謙編、全3巻）、宗高書房、1960-66年。

『明治文化全集』（全28巻・別冊・補巻）、日本評論社、1968-74年。

森林太郎『鷗外全集』（第21巻）、岩波書店、1988年8月。

II. 展覧会カタログ

『交差するまなざし——ヨーロッパと近代日本の美術』（東京国立近代美術館・国立西洋美術館編）、東京国立近代美術館、1996年。

III. 二次資料

1) 単行書

今道友信『美学の歴史』（『講座美学1』）、東京大学出版会、1984年5月。

金田民夫『日本近代美学序説』法律文化社、1990年3月。

佐藤道信「近代史学としての美術史学の成立と展開」（辻惟雄先生還暦記念会『日本美術史の水脈』）、ペリかん社、1993年6月。

佐藤道信『〈日本美術〉誕生 近代日本の「ことば」と戦略』講談社、1996年12月。

神林恒道『日本の芸術論 伝統と近代』ミネルヴァ書房、2000年4月。

米倉迪夫（他）『日本における美術史学の成立と展開』東京文化財研究所、2001年3月。

岩城見一編『芸術／葛藤の現場 近代日本芸術思想のコンテクスト』晃洋書房、2002年3月。

岩崎允胤『日本近代思想史序説』明治期前篇 上・明治期後篇 下、新日本出版社、2002年5月。

神林恒道『美学事始 芸術学の日本近代』勁草書房、2002年9月。
神林恒道『近代日本の「美学」の誕生』講談社学術文庫、2006年3月。
神林恒道編著『京の美学者たち』晃洋書房、2006年10月。
濱下昌宏『主体の学としての美学 近代日本美術史研究』晃洋書房、2007年5月。

2) 論文

山本正男「明治時代的美学思想」、『国華』722、726、727、729号、1952年。
山本正男「明治の美学——美学と批判精神」、『国文学解釈と鑑賞』25巻1号、1960年1月。
和高伸二「美学者としての高山樗牛」、『和歌山大学文学部紀要 教育科学』12・13号、1964年2月。
和高伸二「鷗外と樗牛の美学論争」、『甲南大学文学会論集』23号、1964年4月。
磯野友彦「大西祝」、『フィロソフィア』53号、1968年3月。
藤田一美「諸大学における美学講義等開設に関する資料」、『美學』87号、1971年。
久保田芳太郎「没理想論争をめぐって——モールトンとハルトマン」、『比較文学年誌』8号、1972年3月。
高階秀爾「鷗外と美術批評（森鷗外と日本の近代（特集））——（鷗外・文学の〈核〉）」、『国文学 解釈と教材の研究』18巻10号、1973年8月。
渡辺和靖「美学者としての高山樗牛」、『哲学と教育』23号、1975年。
金田民夫「明治期における日本美学の基礎」、『人文科学』2巻4号、1976年12月。
金田民夫編「明治美術史年表」、『人文科学』2巻4号、1976年12月。
金田民夫「大西祝の美学（〔同志社大学〕哲学及倫理学専攻創設五十周年記念号）」、『文化学年報』27号、1978年3月。
磯野友彦「大西祝における西洋思想と日本的なもの」、『比較思想研究』5号、1978年12月。
原田実「岡倉天心の「日本美術史」について」、『東京国立博物館紀要』15号、1979年。
金田民夫「大西祝の文藝思想」、『美學』31巻2号、1980年9月。
山田芳則「大西祝論」、『文化史学』36号、1980年11月。
金田民夫「明治期的美学思想に与へたフェノロサの影響」、『Lotus』3号、1983年2月。
石田忠彦「逍遥における「理想」の意味——没理想論争への一視点」、『人文学科論集』22号、1985年。
森東吾「フェノロサにおける美術史の構想と特色」、『Lotus』6号、1986年2月。
中村義一「高山樗牛と美の悲哀」、『美學』37巻2号、1986年9月。
石関敬三「操山大西祝研究序説——大西と明治の哲学」、『社会科学討究』31号、1986年。
伊藤敬一「森鷗外的美術論——原田直次郎・外山正一をめぐって」、『日本文学誌要』36号、1987年3月。
森東吾「フェノロサにおけるスペンサーとヘーゲル」、『Lotus』7号、1987年3月。
兵頭高夫「日本におけるショーペンハウアー受容の問題——ケーベルを中心に」、『武蔵大学人文学会雑誌』21巻1・2号、1990年3月。
坂井健「没理想論争における鷗外とE.V.ハルトマン」、『日本語と日本文学』12号、1990年。
吉田千鶴子「大村西崖の美術批評」、『東京芸術大学美術学部紀要』26号、1991年3月。
浜下昌宏「西周による〈aesthetics〉理解とその邦語訳（美学会第四十六回全国大会報告）」、『美學』46巻3号、1995年12月。

高木博志「日本美術史の成立・試論——古代美術史の時代区分の成立」、『日本史研究』400号、1995年。

「(特集)近代日本と西洋思想の受容」、『比較思想研究』23号、1996年。

浜下昌宏「森鷗外「審美学」の研究(1)——序説」、『論集』45巻1号、1998年7月。

並木誠士・高松麻里・永島明子「日本美術史形成期の研究(1)『稿本日本帝国美術略史』の作品選択と記述」、『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告 人文』47号、1998年。

岩崎允胤「西周と〈美妙学説〉」、『東アジア研究』23号、1999年2月。

岩崎允胤「岡倉天心と新時代の美術思想——日本美術の発見と再生」、『大阪経済法科大学論集』75号、1999年11月。

天貝義教「〈美術〉という言葉についてのノート」、『秋田公立美術工芸短期大学紀要』4号、1999年。

岩崎允胤「中江兆民とE.ヴェロンの美学」、『大阪経済法科大学論集』78号、2000年11月。

森仁史「[資料紹介]『稿本日本帝国美術略史』の成立と位相」、『近代画説』10号、2001年。

天野勝重「高山樗牛と大西祝一樗牛の〈美意識〉形成について」、『阪神近代文学研究』4号、2002年3月。

長尾宗典「高山樗牛の〈日本主義〉思想——日清戦後期における「国家」と「美学」」、『日本歴史』667号、2003年12月。

佐藤道信「講演 近現代日本における〈美術〉の展開(第9回美術教育研究大会大会企画 近・現代史のなかの美術と教育)」、『美術教育研究』9号、2003年。

小川裕充「『美術叢書』の刊行について ヨーロッパの概念“Fine Arts”と日本の訳語「美術」の導入」、『美術史論叢』20号、2004年。

長尾宗典「高山樗牛における「美学」の転回——「美的生活」論提唱の思想的根拠」、『年報日本史叢』2004号、2004年。

長尾宗典「『日本美術史』の試み—高山樗牛における「国民美術」と「ロマンチズム」(特集 近代の歴史思想)」、『季刊日本思想史』67号、2005年。

坂井健「森鷗外「審美論」と本保義太郎筆録「美学」ノート」、『京都語文』13号、2006年11月。

依田徹「岡倉天心におけるIdealの位相——「妙想」から「理想」へ」、『五浦論叢』13号、2006年。

吉田 直子・井上 康彦「翻刻『森鷗外氏講義 美学』——本保義太郎筆記ノート(於東京美術学校)」、『カリスタ』14号、2007年。

G 福澤門下生と美術

I. 一次資料

1) コレクター著作

ブルワルド・リットン著・益田克徳訳『夜と朝』(『明治翻訳文学全集訳家編2 福地桜痴・益田克徳集』大空社、2003年7月所収)。

グリーンリーフ・ペリム原選・益田克徳・黒川誠一郎・高木豊三翻訳『證據論拔萃』第1巻・第2巻、1877年4月、11月(『日本立法資料全集』別巻351、信山社出版 2005年6月所収)。

高橋義雄『へそ茶』箒文社、1915年11月。

高橋箒庵・熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記』(全13冊)、箒文社、1914-1920年(1989年3月淡交社より復刊)。

高橋義雄『大正名器鑑』(全11冊)、大正名器鑑賞編纂所、1921-1926年(1986年12月広峰社より覆刻)。

高橋義雄『大正茶道記』（全8冊）、廣文堂書店、1921-1928年（1991年10月淡交社より復刊）。

高橋義雄『山公遺烈』慶文堂、1925年。

高橋義雄『昭和茶道記』廣文堂書店、1929年。

高橋義雄『近代道具移動史』廣文堂書店、1929年。

高橋義雄『茶道實演録』廣文堂書店、1931年。

高橋義雄『筭のあと』（上・下）、秋豊園、1933年7月・11月（1975年6月復刊）。

高橋義雄『福澤先生を語る——諸名士の直話』岩波書店、1934年。

（筭庵）高橋義雄『茶道読本』秋豊園出版部、1936年（1949年5月、ローラン社）。

高橋義雄『天正昭和北野大茶湯 古今茶道の對照』秋豊園出版部、1936年。

高橋義雄『十二月茶の湯』秋豊園出版部、1938年。

益田孝・高橋義雄『遠州蔵帳図鑑』（上・下）、寶雲舎、1938年（1981年12月、東洋書院）。

高橋義雄『趣味ぶくろ』秋豊園出版部、1938年。

高橋義雄『萬象録高橋筭庵日記』（全8巻）、思文閣出版、1986-91年。

武藤山治原作・服部秀朋色『醒めたる力——政界革新劇全五幕』實業同志會、1924年。

武藤山治『スペンサー政治論』白鳳社、1925年。

武藤山治『井上蔵相の錯覚』東洋經濟新報社、1930年。

武藤山治『武藤山治全集』（全9冊）、新樹社、1963-66年。

池田成彬等編『現代産業叢書 第2巻（金融・保険編）』日本評論社、1929年。

池田成彬述・柳沢健著『財界回顧』世界の日本社、1949年。

池田成彬述・柳沢健著『故人今人』世界の日本社、1949年。

池田成彬『私の人生観』文藝春秋新社、1951年。

池田成彬『私のたけのこ哲学』北辰堂、1952年。

藤原銀次郎『工業日本精神』日本評論社、1935年。

藤原銀次郎『忙閑三年』東洋經濟新報社、1942年。

藤原銀次郎述・下田将美編『藤原銀次郎回顧八十年』大日本雄弁會講談社、1949年。

藤原銀次郎『私の経験と考へ方』高風社、1951年。

藤原銀次郎『私の事業観・人生観』四季社、1952年。

藤原銀次郎『私の處世觀』要書房、1954年。

藤原銀次郎・寺沢栄一『仕事のみち暮らしのみち』実業之日本社、1957年。

藤原銀次郎『私のお茶』講談社、1959年。

藤原銀次郎『世渡り九十年』実業之日本社、1960年。

藤原銀次郎『福澤論吉人生の言葉』実業之日本社、2008年。

小林一三著・石山賢吉編『小林一三全集』（全7巻）、ダイヤモンド社、1951年。

小林一三・中野友礼・五島慶太著・三宅晴輝編『仕事の世界』春秋社、1951年。

小林一三『小林一三日記』（全3巻）、阪急電鉄株式会社、1991年。

小林一三『おもひつ記』阪急コミュニケーション、2008年。

松永安左エ門『乱世に生きる——松永安左エ門對話集』經濟往来社、1969年。

松永安左エ門『松永安左エ門著作集』（全6巻）、五月書房、1982-83年。

山口吉郎兵衛『うんすんかるた』リーチ、1961年。

山口吉郎兵衛『茶人鷹司輔信』リーチ、1963年。

高橋誠一郎『経済学史略』泉文堂、1953年。

高橋誠一郎『新修浮世絵二百五十年』中央公論美術出版、1961年。

高橋誠一郎『浮世絵と経済学』毎日新聞社、1961年。
高橋誠一郎『江戸の浮世絵師』（「日本の美術」22）、平凡社、1964年。
高橋誠一郎『福澤諭吉——人と学説』長崎出版、1979年。
高橋誠一郎『随筆慶應義塾——エビメータウス抄』慶應通信、1982-83年。
高橋誠一郎『高橋誠一郎経済学史著作集』創文社、1993-94年。
高橋誠一郎『虎が雨』慶應通信、1994年。

2) 所蔵品カタログ

『蕉村——逸翁美術館蔵品目録』（逸翁美術館編）、便利堂、1983年。
『逸翁美術館名品図録——逸翁清賞』逸翁美術館、1992年。
『松永耳庵遺愛品図録』（柴田桂作編）、松永記念館、1976年。
『松永耳庵遺愛品拾遺』（柴田桂作編）、松永記念館、1980年。
『高橋誠一郎コレクション浮世絵』（全7巻、檜崎宗重ほか編）、中央公論社、1975-77年。
『広重東海道五十三次八種四百十八景——慶應義塾高橋誠一郎浮世絵コレクション』小学館、1988年。
『高橋誠一郎浮世絵コレクション目録——慶應義塾所蔵』慶應義塾大学三田メディアセンター、1994年。

3) 売立カタログ

『朝吹柴庵売立目録』
『朝吹氏野崎氏蔵品入札』東京美術倶楽部、1920年。
『朝吹柴庵遺愛品入札』東京美術倶楽部、1928年。
『益田家御所蔵品入札』東京美術倶楽部、1923年。
『一木庵高橋家所蔵品入札目録』東京美術倶楽部、1930年。
『武藤山治氏所蔵品第二回目録』東美倶楽部、1923年。
『武藤山治売立目録』1924年。

II. 展覧会カタログ

『近代の茶人たち——茶道特別展』五島美術館、1974年。
『鈍翁の眼』五島美術館、1998年。
『逸翁美術館名品展特別陳列』サントリー美術館、1974年。
『小林一三愛蔵逸翁美術館絵画名品展——室町の絵巻から円山四条派まで』（朝日新聞大阪本社企画部編）、朝日新聞大阪本社企画部、1987年。
『「小林一三の眼」逸翁美術館開館四十周年記念』サントリー美術館、1997年。
『逸翁美術館の名宝』（逸翁美術館編）、MOA美術館、1990年。
『逸翁美術館名品展——蕉村と呉春』サントリー美術館、1981年。
『茶の湯名品展——松永耳庵翁コレクション』（富山美術館編）、富山美術館、1986年。
『近代小田原三茶人展——鈍翁・幻庵・耳庵とその周辺』小田原市郷土文化館、1988年。
『松永耳庵——老樗荘の日々』小田原市郷土文化館、1997年。
『松永耳庵コレクション』（福岡市美術館編）、福岡市美術館・東京国立博物館、2001年。
『茶人の書——松永耳庵と近代の数寄者たち』小田原市郷土文化館、2005年。
『滴翠美術館名品展』小田原百貨店、1978年。

『慶應義塾命名百年——慶應義塾大学名誉博士記念松永左エ門・高橋誠一郎両君資料展、同出品目録』（慶應義塾編）、慶應義塾、1968年。

『高橋誠一郎コレクション浮世絵名作展』（日本浮世絵協会・慶應義塾編）、慶應義塾、1983年。

『浮世絵の美200年江戸庶民のこころ——高橋誠一郎コレクションから』（北海道立近代美術館編）、札幌テレビ放送、1988年。

『慶應義塾所蔵高橋誠一郎コレクション浮世絵名品展』（創造文化社編）、三越美術館、1993年。

『常盤山文庫名品選——墨の彩り』（根津美術館・常盤山文庫編）、常盤山文庫、2003年。

Ⅲ. 二次資料

1) 単行書

原田伴彦『近代数寄者太平記』淡交社、1971年。

瀬木慎一編『東京美術市場史』東京美術倶楽部、1979年。

熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、1980年。

田中日佐夫『美術品移動史——近代日本のコレクターたち』日本経済新聞社、1981年。

馬場あき子・NHK取材班『秘宝・三十六歌仙の流転——絵巻切断』日本放送出版協会、1984年。

田中親美復元『佐竹本三十六歌仙絵巻 大和文華館収蔵』（全2冊）、美術公論社、1984年。

小松茂美『墨香秘抄』芸術新聞社、1985年。

『新青山荘清賞 根津美術館名品聚成』（全4冊）、根津美術館、1987-99年。

熊倉功夫『近代数寄者の茶の湯』河原書店、1997年。

『茶の湯美術館』（全3冊、徳川義宣ほか編）、角川書店、1997-98年。

熊倉功夫『遊芸文化と伝統』吉川弘文館、2003年。

大西理平『朝吹英二君伝』図書出版社、1990年。

『三井銀行八十年史』（三井銀行八十年史編纂委員会）、三井銀行、1957年。

長井實『自叙益田孝翁傳』内田老鶴圃、1939年。

白崎秀雄『鈍翁・益田孝』（上・下）、新潮社、1981年。

松田延夫『益田鈍翁をめぐる9人の数寄者たち』里文出版、2002年。

大塚栄三『益田克徳翁伝』東方出版、2004年。

有竹修二『武藤山治』時事通信社、1962年。

入交好脩『武藤山治』（「人物叢書」116）、吉川弘文館、1964年。

武藤治太・谷沢永一・植松忠博『武藤山治の実像と業績』（「国民会館叢書」38）、国民会館、2001年。

武藤治太『武藤山治と芸術』（「国民会館叢書」65）、国民会館、2006年。

松田尚士『武藤山治と時事新報』（「国民会館叢書」53）、国民会館、2004年。

松田尚士『軍事救護法と優遇改善案 武藤山治の活動』（「国民会館叢書」別冊）、国民会館、2005年。

玉井清『武藤山治と行財政改革 普選の選挙ポスターを手掛かりに』（「国民会館叢書」66）、国民会館、2006年。

武藤治太『武藤山治の足跡』（「国民会館叢書」70）、国民会館、2007年。

『池田成彬伝』（池田成彬伝記刊行会編）、慶應通信、1962年。

松浦正孝『日中戦争期における経済と政治——近衛文麿と池田成彬』東京大学出版会、1995年。

松浦正孝『財界の政治経済史——井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代』東京大

学出版会、2002 年。

『藤原銀次郎、小林一三、藤山愛一郎集』（「現代随想全集」第 23 卷）、創元社、1954 年。

水谷啓二『藤原銀次郎伝』（「日本財界人物伝全集」第 4 卷）、東洋書館、1954 年。
紙の博物館、藤原科学財団編『藤原銀次郎の軌跡——生誕百二十周年記念』紙の博物館、1989 年。

『小林一三翁の追想』（小林一三翁追想録編纂委員会編）、小林一三翁追想録編纂委員会、1961 年。

青地晨ほか『実業の覇者』（「人物昭和史」2）、筑摩書房、1978 年 4 月。

阪田寛夫『わが小林一三——清く正しく美しく』河出書房新社、1983 年 10 月。

丸谷才一編『風俗を変革する』（「言論は日本を動かす」第 10 卷）、講談社、1985 年。

大原由紀夫『小林一三の昭和演劇史』演劇出版社、1987 年。

『松永安左衛門の憶い出』（松永安左エ門の憶い出編纂委員会編）、電力中央研究所、1973 年。

小島直記『松永安左衛門の生涯』松永安左エ門伝刊行会、1980 年。

白崎秀雄『耳庵松永安左エ門』新潮社、1990 年。

橘川武郎『日本電力業の発展と松永安左エ門』名古屋大学出版会、1995 年。

『山口銀行史』（本編・資料編、銀行史編纂委員会編）、山口銀行、1999 年。

2) 論文

原田茂弘「高橋箒庵の茶の湯における人的構成」、『日本史学集録』（筑波大学）17 号、1994 年。

原田茂弘「高橋箒庵の茶の湯における人的構成（続）」、『日本史学集録』（筑波大学）18 号、1995 年。

石川武治「近代茶会の床飾り——高橋箒庵の茶会記から」、『茨城県立歴史館報』31 号、2004 年 3 月。

小山玲子「明治大正期における茶の湯と茶人——高橋箒庵と茶室の蒐集（論考）」、『比較文化論叢 札幌大学文化学部紀要』16 号、2005 年 9 月。

齋藤康彦「近代数寄者のネットワークと存在形態——高橋箒庵「茶会記」を素材にして」、『山梨大学教育人間科学部紀要』9 号、2007 年。

土屋和男「『大正茶道記』に見られる近代数寄者の住宅の所在と立地」、『日本建築学会計画系論文集』621 号、2007 年 11 月。

土屋和男「近代数寄者の別荘建築における場所性と姿——田舎家をめぐる多文化的状況と美意識」、『常葉学園大学研究紀要 教育学部』28 号、2008 年 3 月。

小野圭史「武藤山治翁と蕪村」、『日本美術工芸』184 号、1954 年 2 月。

松本康隆「近代の茶室評価のための一試論——小林一三の茶室を通して」、『建築史学』47 号、2006 年 9 月。

「逸翁と美術」、『日本美術工芸』500 号、1980 年 5 月。

「高橋誠一郎先生追悼記念」、『浮世絵芸術』72 号、1982 年 5 月。

田中秀臣「高橋誠一郎の浮世絵と経済学」、『上武大学商学部紀要』12 卷 1 号、2000 年 10 月。